

日常生活における自己呈示と 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連

小 島 弥 生^{*1}

要 旨： 他者からの評価に対する欲求である賞賛獲得欲求と拒否回避欲求（小島・太田・菅原，2003）の構成概念妥当性を検討するために、小林・谷口（2004）の一般的自己呈示イメージ尺度、谷口・小林（2005）の一般的自己呈示行動尺度を用いて、尺度の因子得点間の相関関係を検討した。イメージ尺度との相関関係については、先行研究（谷口・小林，2004）と同様の相関パターンが得られた他に、いくつかの因子については先行研究と異なるパターンが示された。これらの結果はいずれも、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の構成概念妥当性を検証できるものであった。また、行動尺度との相関関係についても、イメージ尺度から予測可能な相関関係が得られ、賞賛獲得欲求と拒否回避欲求の構成概念妥当性が示された。

キーワード：賞賛獲得欲求・拒否回避欲求、他者からの評価、日常生活での自己呈示、一般的自己呈示イメージ尺度、一般的自己呈示行動尺度

問題と目的

Leary（1994）によれば、自己呈示とは「（自己の社会的な印象が重要な対人場面において）自己に対する他者の知覚（印象）をコントロールしようとする過程」（p.2）である。本研究では、自己に関する印象をコントロールするという目標を動機づけるものは何か、という観点から、日常生活での自己呈示における個人差傾向と、他者からの評価に対する欲求との関連に注目する。

自己の行動や態度に対して他者の注視がある状況下では、他者の抱く自己の印象をコントロールしようとする動機が高まりやすいことは容易に想像される。しかし、私たちは他者に注視されるといった特別な状況以外にも、日常生活のさまざまな場面で、他者の目に映る自己の印象を意識して自分の行動に気を配ることがある。この点について、小林・谷口（2004）は、ある個人が日常生活において他者に示したいと考えやすい印象の種類を測定するための「一般的自己呈示イメージ尺度」（以下、イメージ尺度と略す）の開発を試みている。この尺度は、ある個人が自分の「何を」自己呈示するかという impression construction のプロセスを研究するという立場から、日常的な相互作用の中での特定の自己呈示の方法（種類）を測定する尺度とされている。予備調査で得られた66個の具体的なイメージを基に項目選定のための調査が実施され、最終的に9つの因子（運動能力・楽しさ・外見的魅力・癒し・知的

* 1 埼玉学園大学人間学部

能力・精神的強さ・威圧的・配慮・助けたい)を構成する31項目が残され、「イメージ尺度」とされている。

また谷口・小林(2005)では、そうした印象を呈示するために個人がとりやすい行動の種類(方法)を測定するための「一般的自己呈示行動尺度」(以下、行動尺度と略す)を作成している。この尺度は、予備調査から抽出された61の行動を基に、最終的にはやはり31項目が選定されている。「イメージ尺度」と同様に、「行動尺度」も9つの因子(面白い行動・配慮援助行動・前向き行動・スポーツ行動・知的行動・外見行動・威嚇行動・依存行動・人づきあい行動)から構成されている。「行動尺度」の各因子は基本的に「イメージ尺度」の因子と対応している(例、知的行動-知的能力)。しかし中には、「面白い行動」と「人づきあい行動」の2つの因子がともに「イメージ尺度」の「楽しさ」と対応し、「配慮援助行動」は「配慮」イメージと対応するとともに「癒し」イメージとも対応するなど、2つの尺度における因子間の対応が1対1となっていない側面も示されている。

本研究では、上記の2つの尺度が日常生活での自己呈示における個人差傾向、つまり、ある個人が日常的にどのようなイメージを関わりのある他者に示そうとこころがけていて、そのためにどのような行動をとりやすいか、を測定できる尺度であることをふまえ、そのような個人差傾向と、他者からの評価に対する欲求との間にどのような相関関係がみられるかを検討する。他者からの評価に対する欲求として小島・太田・菅原(2003)の「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」をとりあげ、「イメージ尺度」および「行動尺度」との相関関係を調べ、そこから賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の構成概念の妥当性について考察することが、本研究の目的である。

谷口・小林(2004)では、「イメージ尺度」の妥当性を検討するために、セルフ・モニタリング尺度や親和動機などとともに、公的自己意識の強い人にみられる2つの欲求として菅原(1986)によって示された「賞賛されたい欲求」と「拒否されたくない欲求」を用いて、「イメージ尺度」の各因子(ただし、後から項目を付け加えた第9因子の「助けたい」を除く8因子)との相関関係を調べている。そして、「賞賛されたい欲求」は「精神的強さ」と「威圧的」の2因子を除く6つの因子に対して、.23~.55の正の相関係数が算出され、「拒否されたくない欲求」は「配慮」因子と正の相関関係($r = .33$)、「威圧的」因子と負の相関関係($r = -.20$)があることを示している。

「賞賛されたい欲求」は他人からの肯定的な評価を獲得したいという欲求であり、『みんなの人気者になりたい』、『人を感心させたい』といった項目(計5項目)から構成されている。菅原(1986)によると、この欲求の強い人は、対人関係における自己のイメージとして『おしゃれ』、『ゆかい』など他者に対する自己顕示的な自己イメージを抱きやすいとされている。谷口・小林(2004)の結果は、賞賛されたい欲求の強い人ほど、運動能力がある、楽しい人物である、外見的魅力がある、安心できる人物である、知的である、他者に対して配慮のできる人物である、などのポジティブなイメージを呈示するところをこころがけている、ということであるから、菅原(1986)の結果と大きく矛盾するものではない。また、「拒否されたくない欲求」は他者からの否定的な評価を回避したいという欲求であり、『嫌われたくない』、『変な人だと思われたくない』といった項目(計4項目)から構成されている。菅原(1986)は、この欲求の強い人は、対人関係において『愛想のいい』、『引っ込み思案』といった自己イメージを抱きやすいとし、これらのイメージをまとめて『善良な市民イメージ』と命名している。谷口・小林(2004)の結果は、拒否されたくない欲求の強い人ほど、他者に対して配慮のできる人物であるというイ

メージを呈示し、威圧的な人物であるというイメージを呈示しないようにこころがけている、ということであるから、菅原（1986）の結果と類似しているといえる。以上のことから、日常生活での自己呈示における個人差傾向のうち、ある個人が日常的にどのようなイメージを関わりのある他者に示そうとこころがけているかという側面と、他者からの評価に対する欲求との間に、何らかの相関関係がみられることがわかる。

しかし、これらの先行研究では、自己呈示という「行動」そのものについてあまり検討されていない。まず、菅原（1986）の尺度は、『人を感心させたい』、『嫌われたくない』など、状況や条件とは無関係に誰もが比較的抱きやすい、対人レベルの願望や欲求を示す項目から成立している。このため、賞賛されたい欲求や拒否されたくない欲求の強さは、意識レベルでの願望を反映しているに過ぎず、他者からの肯定的評価の獲得ないしは否定的評価の回避を目標とする対人的戦略や行動目標までは測定しきれない。この点について、小島・太田・菅原（2003）は、欲求を基にした戦略もしくは行動のとり方に焦点づけて、菅原（1986）の尺度を発展させた「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」を作成している。

賞賛獲得欲求の強さは、自己の能力の高さや性格の良さなど、自己の肯定的な側面への注意を喚起し、そのような側面を呈示する必要がある対人場面での積極性につながると考えられる。小島他（2003）の賞賛獲得欲求尺度（計9項目、表1参照）は、『人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい』、『自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる』といった項目から構成されており、対人レベルの願望ではなく、他者からの肯定的な評価の獲得を目標とした動機づけの強さを測定できるようになっている。一方、拒否回避欲求の強さは、自己の否定的な側面が他者に露呈しないことに注意が喚起されるため、対人場面では自己の能力や性格が否定されないように防衛することを促すと考えられる。小島他（2003）の拒否回避欲求尺度（計9項目、表1参照）は、『意見を言うときに、みんなに反対されないかと気になる』、『目立つ行動をとるとき、周囲から変な目で見られないか気になる』といった項目から構成され、やはり対人レベルの願望ではなく、他者からの否定的な評価を避けるという動機づけの強さを測定できる。なお、小島他（2003）は菅原（1986）と同様に、この2つの欲求は一方が他方の対極という関係ではなく、一個人の中にもともに存在し、その人のおかれた対人状況によってどちらかの欲求が活性化しうると仮定し、また、時間の経過にそれほど左右されない比較的安定した個人傾向でもある、としている。

本研究では、小島他（2003）の尺度の方が、対人状況での（ひいては日常場面での）他者からの評価に対する欲求を測定するのによりふさわしいと考え、この尺度を用いて谷口・小林（2004）の関連研究の再現を試みる。

次に、「イメージ尺度」と賞賛・拒否の各概念との相関関係は谷口・小林（2004）において検討されているが、日常生活における自己呈示の行動レベルの測定を試みている「行動尺度」に関する検討は行われていない。また、菅原（1986）の尺度で測定できる欲求の強さは、直接行動に結びつくとは言いがたいため、行動尺度との相関関係を検討する意義があまりないが、小島他（2003）の尺度は対人的戦略や行動目標を含めて「他者からの肯定的な評価の獲得」あるいは「他者からの否定的な評価の回避」に関する欲求の強さを測定するため、それぞれの評価に対する欲求が日常生活での自己呈示行動とどのように関連しているかを検討する意義があると思われる。そこで、小林・谷口（2004）のイメージ尺度とともに、谷口・小林（2005）の行動尺度についても、小島他（2003）の賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺

度との相関関係を検討する。

方 法

1. 調査参加者および調査時期

東京都内の私立大学で、人格心理学の授業を受講する学生および人格心理学演習に参加している学生に対し、調査への協力を依頼した。授業時間中に調査用紙を配布し、その場で回答を求め、回収した。調査時期は、2005年12月であった。回答者数は146名（男性50名、女性96名）であった。

2. 質問紙の構成

質問項目の順序と内容は以下のとおりであった。

(1) 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度（小島・太田・菅原，2003）

各欲求について9項目ずつ、計18項目をランダムに提示し、「ふだんのあなたにあてはまる程度」を「1. あてはまらない」から「5. あてはまる」の5件法で評定を求めた。

(2) 一般的自己呈示イメージ尺度（小林・谷口，2004）

9つの因子を構成する31項目（項目内容は表2参照）のそれぞれに対して、「あなたは、自分のまわりの人にどういふ人と思われるようにここがけているか」を「1. 全くここがけていない」から「6. 強くここがけている」までの6件法で評定を求めた。

(3) 一般的自己呈示行動尺度（谷口・小林，2005）

9つの因子を構成する31項目（項目内容は表3参照）のそれぞれに対して、「あなたは、(2)で答えたようなイメージをまわりの人に与えるために、実際にどのような行動をとっていますか」という質問を与え、ふだんの行動の頻度について「1. 全くしない（0%）」、「2. たまにする（25%）」、「3. 時々する（50%）」、「4. よくする（75%）」、「5. いつもする（100%）」までの5件法で評定を求めた。

この他に、セルフ・モニタリング尺度への回答も求めたが、本研究の分析からは除外した。

結果と考察

それぞれの尺度について、先行研究の因子構造にしたがって、因子を構成する項目の素点を単純集計するかたちで因子得点を算出した。各得点の平均値および標準偏差は、表1～表3に示した。

賞賛獲得欲求得点（以下、賞賛獲得と略す）と拒否回避欲求得点（以下、拒否回避と略す）の相関係数が $r = .17$ ($p < .05$) となり、2つの欲求得点に弱い正の相関があることが示された。したがって、賞賛獲得および拒否回避と、イメージ尺度、行動尺度の各因子間の相関関係について、一方の欲求得点を統制した偏相関係数を求めることにした。

偏相関係数を求めた結果、表4のような結果となった。それぞれの結果について、以下に考察を述べていく。

1. 賞賛獲得・拒否回避とイメージ尺度の各因子との関係

まず、賞賛獲得はイメージ尺度のすべての因子と正の相関関係があった。先行研究の谷口・小林

表 1 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度の項目内容と本研究での基礎統計量

尺度名 平均値 (SD)	項目内容
賞賛獲得欲求 28.83 (6.79) (理論的範囲は9 - 45)	人と話すときにはできるだけ自分の存在をアピールしたい
	自分が注目されていないと、つい人の気を引きたくなる
	大勢の人が集まる場では、自分を目立たせようと張り切る方だ
	高い信頼を得るため、自分の能力は積極的にアピールしたい
	初対面の人にはまず自分の魅力を印象付けようとする
	人と仕事をするとき、自分の良い点を知ってもらうように張り切る
	目上の人から一目おかれるため、チャンスは有効に使いたい
	責任ある立場につくのは、皆に自分を印象づけるチャンスだ
拒否回避欲求 31.85 (7.66) (理論的範囲は9 - 45)	皆から注目され、愛される有名人になりたいと思うことがある
	意見を言うとき、みんなに反対されないかと気になる
	目立つ行動をとるとき、周囲から変な目で見られないかが気になる
	自分の意見が少しでも批判されるとうろたえてしまう
	不愉快な表情をされると、あわてて相手の機嫌をとる方だ
	場違いなことをして笑われないよう、いつも気を配る
	優れた人々の中にいると、自分だけが孤立していないか気になる
	人に文句を言うときも、相手の反感を買わないように注意する
	相手との関係がまずくなりそうな議論はできるだけ避けたい
	人から敵視されないよう、人間関係には気をつけている

注：実際の測定では、項目の呈示順序はランダムに変えている

(2004) とは異なり、「精神的強さ」および「威圧的」とも弱い正の相関関係がみられた。

先述のように、菅原 (1986) の「賞賛されたい欲求」と比較して本研究で用いた賞賛獲得の尺度は、他者からの肯定的な評価に対する願望レベルのみの欲求ではなく、肯定的な評価を獲得するための戦略や行動目標のレベルも含めた欲求を測定している。このことが、イメージ尺度のすべての因子と賞賛獲得との間に正の相関関係がみられた理由であると考えられる。例えば、願望のレベルで「他者から賞賛されたい」という場合には、威圧的なイメージを与えたいとは考えにくいだろう。また、賞賛されたい欲求は自己顕示的な対人的自己イメージと関連するという菅原 (1986) の知見から、根気強さや忍耐強さなど相対的に顕示性の低い精神的強さというイメージも、他者からほめられたいという願望とは関連しがたいと思われる。しかし、「他者からの肯定的な評価を獲得する」動機づけの強さを問題とする場合には、威圧的なイメージも精神的に強いというイメージも美德や美点となることが考えられる。賞賛獲得は、単なる自己顕示欲ではなく、最終的な目標である「他者からの肯定的な評価の獲得」に向かつてのさまざまな戦略を考慮する程度を測定できていると考えるならば、自己呈示におけるさまざまなイメージと相関関係が見出せることは、その構成概念と矛盾しない。

次に、拒否回避は「配慮」と正の相関関係がみられた点は先行研究と同様であったが、先行研究とは

表2 一般的自己呈示イメージ尺度の項目内容と本研究での基礎統計量

因子名 平均値 (SD)	項目内容
運動能力 12.37 (5.88) (理論的範囲4 - 24)	スポーツができる
	運動神経がよい
	身体を動かすのが好き
	体力に自信がある
楽しさ 17.93 (4.09) (理論的範囲4 - 24)	陽気な
	楽しい
	おもしろい
	活発な
外見的魅力 14.90 (4.86) (理論的範囲4 - 24)	おしゃれな
	容姿がよい
	外見的に魅力的である
	目立つ
癒し 13.52 (3.25) (理論的範囲3 - 18)	ほっとする
	安らげる
	(一緒にいて) 落ち着く
知的能力*a 11.32 (3.66) (理論的範囲3 - 18)	かしこい
	頭が良い
	知識のある
精神的強さ*a 15.76 (4.66) (理論的範囲4 - 24)	根気強い
	忍耐強い
	一生懸命
	精神的に強い
威圧的*a 7.52 (3.26) (理論的範囲4 - 24)	権威的な
	近づきがたい
	怖い
	威圧的な
配慮 14.37 (3.13) (理論的範囲3 - 18)	気遣いができる
	思いやりがある
	他者の気持ちを察することができる
助けたい 7.00 (2.30) (理論的範囲2 - 12)	かわいがってあげたい
	助けたい

注：実際の測定では、項目の呈示順序はランダムに変えている

*a 欠損データがあったため、n = 145

表3 一般的自己呈示行動尺度の項目内容と本研究での基礎統計量

因子名 平均値 (SD)	項目内容
人づきあい行動 6.66 (1.85) (理論的範囲2 - 10)	冗談を言って笑わせる
	笑える話をして、場をなごやかにする
	ばけ、つつこみをする
	よくしゃべる
	出来事を面白く話す
	明るくふるまう
面白い行動 22.01 (5.11) (理論的範囲6 - 30)	気遣って声をかける
	落ち込んでいる人がいたら励ます
	人に親切にする
	困っている人がいたら助ける
配慮援助行動*a 19.25 (3.63) (理論的範囲5 - 25)	相手の話をちゃんと聞いてあげる
	いろんなことに積極的にチャレンジする
	目標や自分のやりたいことを持つ
	何事も一生懸命に取り組む
前向き行動 13.14 (3.39) (理論的範囲4 - 20)	苦しいことがあっても前向きに考える
	一緒にスポーツをする
	スポーツをしているところを見せる
	自分が健康であるという話をする
知的行動 6.27 (2.34) (理論的範囲3 - 15)	知識があるように話す
	難しいことを言う
	自分の良い学業成績の話をする
外見行動 8.68 (2.56) (理論的範囲3 - 15)	服や髪型をおしゃれにする
	ブランド物を持つ
	身だしなみをきちんとする
威嚇行動 4.55 (1.78) (理論的範囲3 - 15)	人前でどなる
	怒ったら怖そうにふるまう
	無愛想にふるまう
依存行動 5.87 (1.92) (理論的範囲2 - 10)	人に頼る
	人に甘える
スポーツ行動 6.24 (2.70) (理論的範囲3 - 15)	人への関心
	いろいろな友達の話をする
	いろいろな人としゃべって楽しそうにする

注：実際の測定では、項目の呈示順序はランダムに変えている

*a 欠損データがあったため、n = 145

表4 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求とイメージ尺度および行動尺度の各因子との相関関係

	他者からの評価に対する欲求			他者からの評価に対する欲求	
	賞賛獲得	拒否回避		賞賛獲得	拒否回避
イメージ尺度因子			行動尺度因子		
運動能力	0.428**	- 0.062	面白い行動	0.409**	- 0.053
楽しさ	0.577**	0.059	配慮援助行動	0.319**	0.047
外見的魅力	0.637**	0.047	前向き行動	0.387**	- 0.200*
癒し	0.354**	0.275**	スポーツ行動	0.330**	- 0.056
知的能力	0.420**	0.205*	知的行動	0.364**	0.089
精神的強さ	0.352**	0.027	外見行動	0.398**	0.157
威圧的	0.246**	- 0.157	威嚇行動	0.082	- 0.086
配慮	0.371**	0.223**	依存行動	0.209*	0.171*
助けたい	0.393**	0.164	人づきあい行動	0.338**	0.138

注：欲求の一方を統制した偏相関係数を算出した

異なる結果もいくつか得られた。まず、先行研究では拒否回避と「威圧的」との間に弱い負の相関関係がみられていたが、本研究では符号の方向性は同じであったものの相関係数の値は有意とはならなかった。さらに、先行研究では無相関であった「癒し」および「知的能力」との関係について、本研究ではともに弱い正の相関関係がみられた。

これらの結果についても、拒否回避が、「他者から嫌われたくない」という願望レベルの概念を表しているのではなく、「他者からの否定的な評価を回避する」動機づけの強さを測定している点を考慮することで、説明可能ではないか。「拒否されたくない欲求」と「威圧的」イメージとの関連とは異なり、「嫌われないためにどんなことができるか」という行動目標レベルを含めた拒否回避の場合には、威圧的なイメージの対人的なマイナス側面は相対的に弱められることが考えられる。ただし、この点については本研究の結果でも $r = -.16$ という、無相関検定上は有意ではないが負の方向の数値がみられているため、データを積み重ねて再検討する必要がある。

拒否回避と「癒し」イメージ、「知的能力」イメージとの間に弱い正の相関関係がみられたことも、「他者からの否定的な評価を回避する」動機づけの強さを測定しているという観点から説明できる。単なる「嫌われたくない」レベルの欲求であれば、対人的なマイナスイメージを避けるだけで十分に欲求が満たされるであろうが、「嫌われないために何ができるか」というレベルを含めての欲求であれば、他者に安心感を与え、好人物イメージを付与しうる「癒し」のイメージと正の関連性が示されてもおかしくない。また、知的に劣っているという、直接的・一時的な対人的イメージとはいいいがたいが、長期的なスパンでみた場合にはマイナスとなりうるイメージを考慮すると、「他者からの否定的な評価を回避する」と「知的能力に関するイメージを相手に与えたいと思うこと」との間に正の相関関係がみられた結果は、それほど奇異な結果とはいえないだろう。

以上のことから、本研究で得られた結果は、小島他（2003）の「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」の構成概念妥当性を示すものと考えられる。また、先行研究（谷口・小林，2004）と同様に、他者から

の評価に対する欲求によって、自己呈示における他者に与えたいイメージが異なることが示されたといえよう。

2. 賞賛獲得・拒否回避と行動尺度の各因子との関係

賞賛獲得は「威嚇行動」を除く行動尺度の各因子と、 r の値が.21～.41の範囲をとる正の相関関係があった。一方、拒否回避は「前向き行動」との間に $r = -.20$ 、「依存行動」との間に $r = .17$ という弱い相関関係がみられたが、行動尺度の因子とは基本的に無相関であった。

賞賛獲得が行動尺度の各因子と基本的に正の相関を示していたという結果は、イメージ尺度と行動尺度の関係を考慮することで説明可能だが、唯一、「威嚇行動」と賞賛獲得は無相関であったという結果は興味深い。イメージ尺度の「威圧的」と行動尺度の「威嚇行動」の間には $r = .61$ というやや強い正の相関関係がみられるのだが、賞賛獲得と「威圧的」の間の弱い正の相関とは異なり、賞賛獲得と「威嚇行動」は無相関であった。ここから、「他者からの肯定的な評価を獲得する」ために、「威圧的」なイメージを与えようとは動機づけられるが、そのイメージを他者に与えるためとはいえ、賞賛獲得の強い人は「威嚇行動」ととらない可能性が示唆される。つまり、「威圧的」なイメージがポジティブなイメージにつながると判断できる状況下で、賞賛獲得欲求の強い人は、「威嚇行動」とは別の行動から「威圧的」なイメージを獲得しようとすることが考えられる。自己呈示において、与えたいイメージを他者に与えるための行動選択に、他者からの評価に対する欲求が調整要因として影響を与える可能性が、ここから示唆されるだろう。

拒否回避については、行動尺度のほとんどの因子と無相関であり、相関のみられた「前向き行動」および「依存行動」との関係も弱かった。この点について、菅原 (2004) のいう、「拒否回避欲求は、自己アピールにおけるブレーキ」の役割を果たす、という観点から説明可能ではないだろうか。他者からの否定的な評価を回避することを目標とした場合、何か行動を起こすことによって他者からの評価を変化させるよりも、何も行動せずに現状の評価を維持することの方が、否定的評価が回避できる可能性が高い。自己アピールについて、このようなリスクの側面（アピールをすることによって他者からの評価がネガティブな方向に変化する可能性）をより重視する傾向が、拒否回避欲求である。したがって、本研究において拒否回避と行動尺度の各因子との間が無相関であったことは、拒否回避欲求には自己アピールをブレーキする役割があるという構成概念の妥当性を示したといえる。さらに、拒否回避が「前向き行動」との間に弱い負の相関関係を示したのは、積極的な行動であればあるほど、自己アピールにおけるリスクもより大きいと考えられることから、特に拒否回避の強い人にとっては日常的に選択しにくい行動であることを示す結果ととらえられよう。

なお、拒否回避が「依存行動」と弱い正の相関関係を示していたことについては、解釈に注意を要するかもしれない。「依存行動」と対応するイメージ尺度の「助けたい」因子との間に、拒否回避は $r = .16$ という、無相関検定では有意とならない相関係数が得られている。小林・谷口 (2004) は、イメージ尺度の「助けたい」因子について、Jones & Pittman (1982) による主張的自己呈示の種類のうちの「哀願」に対応するイメージであるとしている。「哀願」は弱さの自己呈示といえる (安藤, 1994)。「かわいそうな自分」、「不幸な自分」を相手に示して、養護や保護の感情を相手に喚起させる自己呈示であるが、失敗すると「怠け者」や「単なる要求者」と帰属されてしまう可能性がある自己呈示である。

行動尺度の「依存行動」は『人に頼る』、『人に甘える』の2項目からなるが、これらの項目が拒否回避の強さ正の相関を示していることで、他者から嫌われたくない人が弱々しい自分を呈示することで否定的な評価を回避することを狙っているのか、それとも何か別のイメージを呈示するために「依存行動」を選択しているのかは、本研究の知見からは不明であり、再検討の必要性がある。

以上のことから、行動尺度との相関に関する結果もイメージ尺度の結果と同様に、小島他(2003)の「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度」の構成概念妥当性を検証しているといえるだろう。そして、他者からの評価に対する欲求によって、日常的によく用いている自己呈示の種類が異なるといえよう。

まとめと今後の課題

本研究では、賞賛獲得欲求および拒否回避欲求の尺度得点と、一般的自己呈示イメージ尺度の各因子得点、一般的自己呈示行動尺度の各因子得点との間の相関関係を検討することで、賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の構成概念の妥当性を検証した。そして、他者からの肯定的な評価を獲得したいという欲求の強さが、日常生活において多種多様なイメージを自己呈示したいと考える程度や、自己呈示に用いる行動の種類の多様さと結びついていることが示された。また、他者からの否定的な評価を回避したいという欲求の強さは、「癒し」や「配慮」などの穏やかな人物イメージを自己呈示したいと考える程度と関連する傾向があるものの、具体的な行動の選択には結びつかない可能性が示唆された。

本研究は相関研究であるため、今後、さらにデータを収集し、因子得点間の関係性を詳細に検討する必要がある。2つの自己呈示尺度については因子構造をみなおす必要もあるだろう。また、本研究の知見を基に、より具体的な生活場面での自己呈示における、他者からの評価に対する欲求や他者に対して示したいイメージの選択、イメージを示すための行動選択や行動の結果として得られた評価に対する認知・新たな目標設定の個人傾向など、さまざまな問題について考えていく必要もあるだろう。

他者からの評価に対する欲求の強さによって、日常生活における(主として対人場面での)自己呈示方略や呈示したいイメージの種類に違いが見出せるという本研究の知見は、特定の場面での自己呈示を予測するのに役立つかもしれない。例えば、小島(2006)は、就職活動を自己呈示の一形態ととらえ、エントリーシートという事象を取り上げて、シートの記入者の賞賛獲得欲求や拒否回避欲求の強さ、日常生活における自己呈示のパターンなどがエントリーシートの記入に何らかの影響を与えるかについて考察している。ここでは、拒否回避欲求の強さや自己呈示行動尺度のうちの依存行動の頻度の多さが、エントリーシートに記入を求められている内容によっては、マイナスの影響をもたらす可能性(シートを読む人に対して良い印象を与えがたい可能性)が示唆されている。こうした個人傾向の影響が事前に分かっているならば、他者(この場合は就職試験における選考を担当する人物)からの否定的な評価を受ける可能性を回避する方略を、事前に考えて準備することができるかもしれない。

このように、日常生活での自己呈示のパターンや他者からの評価に対する欲求を検討していくことは、対人行動のあり方を考える上で重要であると思われる。

引用文献

安藤清志 1994 見せる自分/見せない自分 - 自己呈示の社会心理学. サイエンス社.

Jones, E.E. & Pittman, T.S. 1982 Toward a general theory of strategic self-presentation. In

J.Suls (Ed.), *Psychological perspective on the self. Vol.1.* (pp.231 - 263), Hillsdale, N.J., Lawrence Erlbaum Associates.

小林知博・谷口淳一 2004 一般的自己呈示尺度作成の試み⁽¹⁾. 日本心理学会第68回大会論文集, 116.

小島弥生・太田恵子・菅原健介 2003 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み. 性格心理学研究, 11(2), 86 - 98.

小島弥生 2006 自己呈示としての就職活動に関する探索的研究 - 準備活動、日常生活での自己呈示スタイルおよび評価欲求の影響について. 埼玉学園大学紀要 人間学部篇, 第6号, 59 - 70.

Leary, M.R. 1994 *Self-presentation: Impression management and interpersonal behavior*. Dubuque, Iowa: Brown & Benchmark.

菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求 - 公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について. 心理学研究, 57(3), 134 - 140.

菅原健介 2004 Topic 12 賞賛獲得欲求と拒否回避欲求. 菅原健介 (編著) ひとの目に映る自己——「印象管理」の心理学入門 (pp.162 - 163).

谷口淳一・小林知博 (2004) 一般的自己呈示尺度作成の試み⁽²⁾. 日本心理学会第68回大会論文集, 117.

谷口淳一・小林知博 (2005) 一般的自己呈示尺度作成の試み⁽³⁾ - 自己呈示行動尺度の作成 - . 日本心理学会第69回大会論文集, 244.